**機関紙『東京ＹＷＣＡ』NO.819　（2025年12月号）**

## クリスマスメッセージ
## 彼女の代わりにイエスを抱く

**「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」（ルカによる福音書2章6-7節）**

渡邊さゆり（日本バプテスト同盟駒込平和教会牧師））

クリスマスおめでとうございます。クリスマスはイエス・キリストの誕生を記念する日です。

ある方が、「自分が生まれたのは、生年月日として登録されている日の三日前だった」と私に話してくださいました。誕生の日、大雪でかなり後になってから実際の誕生月日ではない日が登録されたそうです。戦中のことです。「日にち違いの物語」を聞かされて育ったのでしょう。自分の誕生エピソードを知っている人は必ずこの世にひとりいます。なぜなら、誕生はたったひとりでは起こらないからです。必ず複数で起こるのが誕生です。イエスもマリアと一緒だったのです。マリアもイエスと一緒でした。命がもたらされるその時、人間はひとりではないのです。では、死はどうでしょうか。

私は4年10カ月前にミャンマーで起こった軍事クーデター以後、毎週金曜日にオンラインで「ミャンマーを覚える祈り会」を開いています。クリスマスには255回目を超えます。民主化を求めるZ世代の人々が軍に拘束され、暴力を受け、殺され、知り合いが逮捕状を突きつけられていました。緊急的な応答として集会をもったのです。これが現在も毎週続けられています。「祈りにはいろいろな形があるのではないか」と話し合い、預かった献金をミャンマーでの暴力から命を守るために逃げている人たちに届ける活動を始めることになりました。その活動をアトゥトゥミャンマーと名付けました。アトゥトゥは「同じ」、「一緒に」という意味のビルマ語です。どちらかが、どちらかを助けるという関係ではなく、「お互いに」を大切にしたかったのです。

アトゥトゥがスタートし、最初に、ミャンマーのパートナー団体からご遺体を搬送するための台車をリクエストされました。送られてきた教会の写真には、山のように積み上げられた棺が写っています。人々が同

時に大量に亡くなり、遺体を運ぶ人も道具も足りないのです。私は生きてほしくて祈っているのに、遺体を運ぶ台を送るの？と、正直、しょんぼりしました。私の中には支援の虚像があったのです。送ったお金が食糧や建物になるイメージです。そうすれば、寄付者の心が満たされ、役に立った、人に喜びをもたらせたと思われ、多くの寄付が集まるかもしれません。しかし、現実はそんなものではないと、最初から方向転換をさせられました。コロナが蔓延する中、軍事暴力により、治療を受けられず亡くなる人は増えるばかりでした。遺体が布に包まれ転がっていました。この現場に、アトゥトゥは立つのか？と問われました。台車２台が届けられました。私は、ひとりで死なされる力に抗する生き方をしたいと思うようになりました。

共に生きることは、その人をひとりで死なせないことです。イエスが生まれた時、母マリアがそこにいました。彼女は産んだ子を飼い葉桶へ置いたのです。この桶は家畜の餌入れで、新生児の安らぎの場ではありません。研究者の中には、飼い葉桶を石造の墓のようだという人もいます。イエスが十字架で殺された後、遺体は岩の穴に投げ込まれ、大きな石で封がされました。飼い葉桶にマリアがイエスを寝かせた様子が、イエスの未来に起こる十字架の出来事を預言するかのようです。

彼女の代わりにイエスを抱く人はいないのでしょうか。この子を私が見ていますから､あなたはしばし休んでという人はいないのでしょうか。子も、母も、ひとりにされている 2025 年のクリスマスに、死者を弔い、ひとりで死なせない取り組みを一緒に始めませんか。達成感がないとされるようなことにこそ神は祝福を与えられます。それがイエスの復活によって表されているのです。私たちはひとりで生まれなかったのですから、ひとりで死なされない、殺させない道を歩んでいこうではありませんか。